

ただの感染者だが？

きし川

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

全ての感染者のために自分ができることを……そんな願いを胸に抱いた一人の男の話。

目次

白うさぎ

1

白うやぎ

ウルサス某所の採掘場。別名、強制収容所と呼ばれるこの場所一人の男の手によって殺戮場と化していた。

「三十二」

ヒュン、ドスツ

白い衣に視界を得るための二つの穴しかない粗末な仮面を着けた男が採掘場内の監視塔から弓でウルサスの軍人を弓で射殺していた。

その数、現在三十二人。

しかし、これだけの数の軍人が殺されているにも関わらず一向に騒ぎが起きていなかった。

それは、この男の射撃の腕が恐ろしく良いのと綿密に練られた計算のおかげだろう。

「三十三」

ヒュン、ドスツ

弓に引き、矢を放ち、軍人を射る。

男は淡々とまるで作業のように一連の動作を繰り返している。その姿は機械的なも

のでとても歪であった。普通は人を殺すという行為に何ならかの感情を抱くものであるが男からはそういったものを感じさせないのだ。

「三十四」

男はまた、軍人を射殺する。

周囲を見渡し見える範囲に軍人がいないのを確認すると男は監視塔から降りた。そして、殺した軍人達から矢を回収しながら、他に軍人がいないか探す。

途中、この採掘場で働かされている感染者に出会うが一カ所に集まるようにとだけ言つて素つ気なく対応し、探索に戻る。

やがて、他に射ち漏らしがないのを確認すると男は腰にぶら下げた銃を上に向け照明弾を放つ。

これでここでの男の仕事は終わりだ。後の事は仲間達任せ、男は静かに採掘場を後にした。



「二十九……これで最後か」

別の場所に移動した男は早々に殺す作業を終えていた。最後の一人は建物内にいたので弓では仕留められず、忍び込み、背後から首を切つて殺した。

男はナイフについた血を布で拭うとホルスターに納め、外へ出る。

「ん？」

男が外へ出ると遠くの方から二十から三十人ほどの集団が向かってきているのが見えた。

男はその集団の姿を確認すると集団の方へ向かって歩き出す。

そして、お互いの姿がはつきりと見える距離まで来ると向こうの集団の一人が男に手を振った。

男はそれに片手を上げることと応えたと集団と合流した。

「よお、アーチャー。アンタがここにいてことはもう向こうは片付いたってことか？」

「ああ、一人も逃してはいない。……それと、感染者の事なんだが——」

「分かってるよ、代わりに説得してくれてんだろ？ いつも通りやってやるよ」

「すまないな……」

男……アーチャーの所属する組織レユニオンは感染者で構成された組織だ。そして、レユニオンは感染者を見つけた際に組織への勧誘を行うのだが男はそういったことをしなかった。

「アーチャー。なぜ貴様は勧誘を行わないんだ？」

集団の後ろから白いコートを羽織ったコータス族の女性の前に出て男に言った。

「そんなことを聞いてどうする？ フロストノヴァ」

「少し、気になったただけだ。それとも話せない理由があるのか？」

「……いや、そういうわけではないが」

「では、話せるだろう」

アーチャーは諦めたようにため息をついた。

「——出来れば戦ってほしくないだけだ」

「戦ってほしくない？ 感染者達にか？」

「そうだ。彼らにはこんな血生臭い争いとは無縁な生活を送って欲しいからな。……そして、これは君に対しても思っていることだ」

「なに……？」

「日に日に倒れる頻度が増えてきているし、そろそろ前線を離れても良い頃合いだろう」

アーチャーの言葉にムツと顔をしかめた。

「余計なお世話だ。それに、自分の体の事ぐらいよく分かっている」

「そうか？ 今はまだ大丈夫かもしれないがアーツを使った後、少しフラついているだろう。あれでは、いつの日か戦場で気を失うことになるぞ。それに——」

「黙れ、アーチャー。貴様の物差しで私を測るな」

アーチャーのお節介に苛立ちを覚え、無意識にアーツで足元を凍らせながらアーチャーの言葉を遮るフロストノヴァ。

それを見たアーチャーは参ったなと肩をすくめた。

「……やれやれ、どうなっても知らんぞ」

「貴様がどう思おうと勝手だが、覚悟はできている」

「君が出来ていても、周りの人間は出来ていないだろう。例えば君が満足して死んだとしても遺された者は悲しむぞ」

「……ふん」

返す言葉が思い付かなかったのかそれとも、自分でも思うところがあつたのか分からないがフロストノヴァはなにも言わずにそのままアーチャーの横を通りすぎていった。その後をスノーデビル隊の隊員がついていく。

その時、一人の隊員がアーチャーに小声で声をかけた。

「アーチャー」

「なんだ？」

「姐さんのこと心配してくれるのは嬉しいけどさ、もう少し信じてやってくれないか？

姐さんだつてスゲー頑張ってるんだからさ」

「それは知っている。だが、体の不調がどんどん無視できないものになってきているのを放つてはおけないだろう」

「まあ、そうなんだけどさ……あー、その、なんだ、姐さんだつて子供じゃないんだから自分の面倒ぐらい見れるさ」

歯切れが悪く話す隊員。しかし、アーチャーは首を振る。

「どうだかな、フロストノヴァは例え今にも倒れそうな状況でも戦おうとするだろう」

「確かに姐さんはそういうところあるからなあ、否定はできないんだが……まー、なんだ、姐さんには俺たちがついてるから何かあっても大丈夫だ。だから、アーチャーはそんな心配しなくていいぞ！　じゃあな！」

隊員はそう言つて採掘場へと向かつていった。その背中を見ながらアーチャーは思つた。

（本当に大丈夫だろうか？）



「アーチャー！　大変だ！」

「どうした？」

フロストノヴァとの一悶着から一週間後、ウルサス軍の輸送部隊襲撃作戦に参加していたアーチャーの元に一人の構成員が駆けつけた。

構成員は息を切らしながら、アーチャーに切迫した表情で言った。

「い、今、偵察部隊の奴から連絡があつて……！！　スノーデビル隊が大規模なウルサスの軍隊に襲撃されているらしいんだ！」

「なんだと!?　場所はわかるか！」

「ここから西に行つた所にある駐屯地だ」

「チツ！　彼処か……距離があるな……後の事は任せた。俺はフロストノヴァの所に行く！」

「わかつた！　気を付けて行つてくれ！」

アーチャーは“霊体化”のアーツを使い、フロストノヴァの元へ向かう。

霊体化のアーツは自分の存在を曖昧にすることで一時的に存在を消すアーツであり、この状態のアーチャーに誰も物理的に接触することができなくなる。そして、アーチャー自身は重さが無くなり、いつもより速く動くことができる。

(間に合ってくれ……！)

フロストノヴァの元へ駆けながらアーチャーは祈った。

◇

(くそ……完全に囲まれたか……)

フロストノヴァとスノーデビル隊はウルサスの駐屯地にてウルサスの軍隊に囲まれていた。

どうやら、フロストノヴァが襲撃した駐屯地はウルサスがレユニオンを撃滅するため
の餌であり、フロストノヴァ達はまんまと罠にかかってしまっていた。

「我らウルサス帝国に歯向かう感染者共め！ 貴様らの悪行もここまでだ！ 総員、薄汚い感染者共を血祭りに上げてやれ！」

「オオオオオオツ!!」

ウルサスの指揮官の号令を聞き、ウルサスの兵士達が一斉にフロストノヴァ達に迫る。

「チツ……! なら、一網打尽にしてやろう!」

フロストノヴァは前に出てアーツで向かってくるウルサスの兵士達を凍らせようとした。

(つ……こんな時に……!)

しかし、アーツを使おうとした瞬間、フロストノヴァは立ち眩みを起こし片膝をついた。

「姐さん!」

「狙撃部隊! あのコータスを狙え、術士だ!」

「くそっ……! 姐さんを守れ!」

ウルサスの狙撃部隊がボウガンを構え、フロストノヴァを狙う。狙われているフロストノヴァの前にスノーデビル隊の隊員達が飛び出し、フロストノヴァを守ろうとする。

「打てえ!」

「ぐあっ!」

「いっ……!」

一斉に放たれる矢。飛んでくる矢を腕や体で受けているスノーデビル隊員達の苦痛に満ちた声を聞き、フロストノヴァはなんとかアーツを使おうとする。

(っ……………！ 意識が……………！)

しかし、フロストノヴァの意思に反して体は思うように動かず、だんだん意識が朦朧としてくる。

「うが……………っ！」

隊員の一人が倒れた。それにより、狙撃部隊から放たれた矢がフロストノヴァに迫る。

(……………までか……………)

終わりを悟り、諦めたそのときだった。

「たわけ、だから気を付けろと言ったんだ」

聞こえるはずのない声と共にフロストノヴァに迫っていた矢は見えないなにかに落とされた。その光景にフロストノヴァは目を見開いた。

フロストノヴァの前方の空間が歪み、一人の男が現れる。

「アーチャー……………！」

「とはいえ、無事でよかった。後は任せろ」

救援に向かっていたアーチャーが両手にマチェットを持って前に出る。

「なんだ、貴様は！」

「ただの感染者だが？」

更に一步、アーチャーは距離を詰める。

「ふん、たった一人で何ができる！ 狙撃部隊！ 奴を針ネズミにしてやれ！」

狙撃部隊が一斉にボウガンを構える。

「ハッ、俺を針ネズミにするだと？ 笑わせるな——ッ！」

瞬間、アーチャーの姿が消える。その光景に指揮官は狼狽する。

「なっ!? 奴はどこに行った!？」

「後ろだ。間抜け」

「がっ!？」

指揮官の後ろに移動したアーチャーがマチェットを指揮官の首に突き刺した。

「なっ!?! いつの間に……!?!」

「驚いている場合か？」

「速——っ!」

いつの間にか後ろにいたアーチャーに狙撃部隊の一人が驚くがアーチャーはその狙撃手に一瞬で近づきマチェットで首を切った。

「こ、殺せ！ 早くこいつを殺すんだ！」

「——遅い」

周囲の兵士達が一齐にアーチャーを攻撃するがアーチャーは巧みに攻撃を避け、一人また一人と首をはねていく。

（これが、アーチャーの実力……）

少し体調が回復したフロストノヴァがアーチャーの動きに目を奪われていた。

実はフロストノヴァはアーチャーの戦いを見たことがなくアーチャーの実力を知らなかったし、知ろうともしていなかった。そのため、フロストノヴァの中ではアーチャーは事あるごとに口出ししてくる鬱陶しい奴という認識だった。

（強いな……私以上に……）

しかし、こうしてアーチャーの実力を目の当たりにしてフロストノヴァの中でアーチャーへの認識が少し変わった。

（なぜ、あんなに強いんだろうか……）

そして、アーチャーの強さに興味が湧いた。

「五十……もういないな」

アーチャーはマチェットついた血を布で拭くと鞘に納めた。

そして、フロストノヴァ達の元へ向かう。

「全員、傷を見せてくれ。応急処置ぐらいはした方がいいだろう」

そう言つてアーチャーはフロストノヴァを庇つた隊員達の傷を確認し始める。

「……手持ちの救急キットでは足りないか」

アーチャーは倒れた隊員の傷を見てそういつた。

この隊員はアーチャー来る直前に倒れた者で胴体の三ヶ所に矢が刺さっていた。アーチャーはあまり医療に詳しくはなかつたが下手に抜かない方がいいことは分かつた。

「仕方ない。即席の担架を作つて拠点へ運ぼう。動ける奴は材料になりそうなものを取つてきてくれないか？ 棒と布でいい」

「わかつた、探してくる！」

比較的軽傷な隊員数名が担架の材料になりそうなものを探しに行つた。そして、持つてきた材料で簡易的な担架を作り、担架に隊員を乗せた。

「すまないが運んでやつてくれ。さて次は……」

次に、アーチャーはフロストノヴァの所に向かつた。

「立てるか？」

フロストノヴァに手を差し出す。

「ああ……、……っ」

フロストノヴァはその手をとつて立ち上がる。しかし、少しふらつき倒れそうにな

り、アーチャーはフロストノヴァの体を支える。

「……………こちらも自力では歩けそうにないか。仕方ない」

「な……………っ!? ア、アーチャー! 何を!」

アーチャーはフロストノヴァを抱き抱えた。所謂、お姫様抱っこという奴だ。

アーチャーの行動にフロストノヴァは少し慌てていたがアーチャーは構わずそのまま歩き始める。

「アーチャー……………もう自力で歩けるから下ろしてくれないか」

「ダメだ、さつき意識を失いかけていた奴に歩かせるわけにはいかない。我慢しろ」

フロストノヴァの要求を一蹴するアーチャー。それを聞いてフロストノヴァは下ろしてもらおうのを諦めた。

「……………なあ、アーチャー」

「なんだ?」

「どうして、お前はあんなに強いんだ?」

恥ずかしさをまぎらわす為にフロストノヴァは先ほど感じた疑問をアーチャーにぶつけた。

その質問にアーチャーはどう答えようか数瞬、悩んだがあることを思い付いた。

「そうだな、今ここでそれを教えてやってもいいが、人の忠告を無視した罰だ。自分に見

つけてみる」

そう意地悪そうにフロストノヴァに言ったアーチャー。しかし、言った後に気づく、これではまた怒ってアーツで凍らされるのでは、と

「……そうか、わかった。なら、そうさせてもらおう」

しかし、意外にもフロストノヴァはなにも言わずに素直に頷いた。

（なんだ？ 何故だか嫌な予感がする……）

翌日、その予感は的中する。



「という訳で今日からお前と一緒に過ごすことにする」

「なんでさ」

アーチャーが使っているテントにフロストノヴァが押しかけてきた。

「なんでもなにも、貴様が言ったんじゃないか、自分で見つけろと」

「確かに俺はそう言ったが、だからといって一緒に過ごす必要は無いだろう」

「ついでに言えば昨日の戦闘で兄弟姉妹達が皆、負傷したのでなスノーデビル隊で動けるのは私だけだ。ここまで言えば分かるな？」

「……つまり君の兄弟姉妹達の傷が癒えるまで俺と行動すると？」

「そうだ」

アーチャーは頭を抱えた。こんなことならばあんなこと言わなければよかったと後悔した。

「はあ……わかった」

言った手前、追い出すわけにもいかず、フロストノヴァを単独で行動させるわけにもいかないのでアーチャーは渋々了承した。

「では、よろしく頼む」

「ああ」

そう言ってフロストノヴァは手を差し出し、アーチャーはその手をとって握手した。